

占いからの解放

使徒言行録はイエス・キリストの福音がどのようにしてローマの異教世界へと拡大していったかの記録であるが、それによれば福音が伝えられるところ、必ず異教世界を支配する悪霊的力の対法が起こり、人々がその力から解放されてまったく自由にされるといふ救いの出来事が起った。そのことがフィリピにおいても起ったことをルカは記している。

パウロ一行がいつものように川のほとりの祈り場に行く途中、占いの霊につかれた女奴隷に出会った。占いの霊は直訳すれば「ピューソンの霊」で、ピューソンとは、英語読みではパイソんで、ギリシャ神話に出て来るデルフォイの神託を守っているヘビ或いは龍を意味した。そこから、未来を占い予見する霊や、腹話術師という意味も生じた。つまり、腹の中に霊が宿っていてそれがその人を通して語り出すというのである。今日でいう霊媒である。

フィリピはローマ帝国の植民都市であり、ギリシャ的教養とローマ的規律を誇る町であったが、そこはまた偶像礼拝と迷信の町でもあった。悪霊が神の業に挑戦し、或いは神の業に恐れおののくという現象は福音書にも見られるが（マルコ 3:11）、フィリピの場合は悪霊による伝道の妨害を意味したように見える。パウロはイエス・キリストの御名（権威）によって悪霊に対決し、この哀れな女を悪霊の呪縛から解放した。こうしてイエス・キリストの福音の力が示された。

悪霊現象による困難や悲劇は今日の時代も何ら変わりがない。種々の占いが横行し、呪いやたたりが恐れられる。それが新興宗教の温床となり、雨後のタケノコのようにカルトや信仰宗教が起って人々を惑わす。

イエス・キリストの福音が伝えられるところ、呪いやたたり、不安と恐怖からの解放が起る。キリストにおける罪の贖いと赦し、神の愛とあわれみを発見するとき、初めて人間は自分の運命を支配していると信じられている諸々の霊から解放され、真の平安と喜びが与えられるのである。

このフィリピにおける占い女の救いの出来事は、フィリピの町に一大騒動を引き起こした。収入源を断たれた女奴隷の主人たちは、パウロとシラスを捕らえ、広場に連行し、彼らを市の高官に非合法宗教の宣伝による社会騒乱罪で告訴した。

捕らえられたのはパウロとシラスだけで、ギリシャ人であるルカとギリシャ人との混血児であるテモテは捕えられていないことから、明らかに反ユダヤ人感情が作用していたように思われる。ヒステリックな状況の中で群衆は大混乱に陥り、高官たちのパウロとシラスに対する偏見も加わって、正当な裁判もなしに彼らは鞭打ちの刑に処せられ、不当にも投獄されてしまった。

コリント人への第2の手紙で、使徒パウロは自分がかつて経験した苦難の中で「ローマ人に鞭で打たれたことが3度」と語っているが（11:25）、その一つがこの時の出来事であろう。

パウロはその時の状況を後になってテサロニケ人への手紙でこう書いている。「わたしたちは、先にフィリピで苦しめられ、恥ずかしめられたにも関わらず、わたしたちの神に勇気を与えられて、激しい苦闘のうちに、神の福音をあなたがたに語ったのである」（第1テサロニケ 2:2）。信仰の先人たちの「激しい苦闘」によって福音は今日の私たちにまで伝えられて来たことを決して忘れてはならない。